

保育の記録にみられる手技

—明治30年代後半から大正時代にかけて—

清原 みさ子

はじめに

『愛知県立大学文学部論集』第55号及び第56号で、明治時代の京都市幼稚園における手技について、城巽幼稚園と柳池幼稚園の保育案等を中心に見てきた。ここで取り上げた資料の中には、実際にやった様子が「成績」（「成蹟」と記されている時もあるが、以下「成績」とする）として記述されているものもあった。また、京都市の幼稚園の保育日誌も残されている。これらの日誌には、行事にかかわる記述はなされているが、日常的な保育内容に関しては、ほとんど記述されていない。このたび、名古屋市立第一幼稚園（以下、第一幼稚園とする）に残されている「週録」をみることができたので、この資料を中心に、京都市立幼稚園の諸資料とも比較しながら、記録に残された手技の実際を明らかにしたい。

第一幼稚園に残されていたのは、明治39年度の「一ノ組週録」、明治40年度の「週録式之組」、明治41年度の「^(ママ)周録二の組」、明治43年度の「第式之組週録」、明治44年度の「週録壹之組」「壹之組週録」および組の名称がないもの、明治45年度の組の名称がないもの、大正2年度の「週録第一の組」「週録二の組」「週録三の組」「週録第三ノ組」、昭和2年度「保育案及日誌乙二ノ組」、昭和4年度「保育案一組」「保育案及日誌乙二組」である。1年分残されているわけではなくて、一番多い明治39年度の「一ノ組」は4月から翌年2月まで、少ないものだと3ヵ月分位である。ここでは、明治時代と大正時代の組がわかっている10点を取り上げる。組名は書き方が様々であるが、以下「一の組」「二の組」「三の組」と記述することとする。この中に記されている手技の種類の手書き方も様々であるが、以下「積木」「摺紙」「画き方」「板排」「箸排」等と記述することとする。

1. 取り上げられたこととその頻度

まず「一の組」であるが、行われた回数の多い順にあげると、明治39年度は「摺紙」「画き方」「積木」、同数で「板排」と「剪紙」、「箸排・箸環」「豆細工」「縫取」「ツナギ」「織紙」である。明治44年度は2種類の「週録」とも「摺紙」「積木」「画き方」「板排」「剪紙」「縫取」の順で、続いて一方は「箸排」「豆細工」「織紙」が同数、もう一方は「箸排」と「豆細工」は同数、一番少なかったのが「織紙」であった。大正2年度には「画き方」「摺紙」、同数で「積木」と「剪紙・貼紙」、「板排」、「箸排」、同数で「縫取」と「織紙」、「豆細工」となっている。

どの年度でも「摺紙」や「画き方」、「積木」が多く行われているが、残されていた「週録」の日数が年度により異なるので、手技として記述されていた回数に占める割合でみると、「摺紙」は明治39年度が29%で、他は22～25%であった。「画き方」は大正2年度には、25%と占める割合が高くなっている。「積木」は明治44年度が20%を超え高くなっている。「箸排」は、逆に明治39年度より44年度、大正2年度の方が占める割合が低くなっている。「板排」は、大正2年度が低くなっている。

次に「二の組」も同様に行われた回数の多い順にあげると、明治40年度は「摺紙」「積木」、同数で「画き方」「板排」、同数で「箸排・箸環」と「豆細工」、「剪紙」「つなぎ」である。明治41年度は、「摺紙」「積木」「画き方」「板排」「箸排・箸環・環排」「剪紙」「豆細工」「ツナギ」の順である。之に加えて、「剪紙」と「豆細工」を合わせたものが1回行われていた。明治43年度は、順に「摺紙」「積木」「板並べ」「画き方」「箸・箸環・環排」「つなぎ」、同数で「豆細工」「剪紙・貼紙」である。大正2年度は2種類の「二の組」が残されていて、「摺紙」「画き方」「積木」が上位3位までであることは同じである。4、5位は一方は「剪紙」「板排」、もう一方はこの逆で、「板排」「剪紙」である。6、7位は、一方が「豆細工」「箸環排」であるが、もう一方はこの2種類が同数である。

「二の組」では、どの年度でも「摺紙」が最も多く行われている。「一の組」と同様に、手技として行われていたことに占める割合をみると、「摺紙」は明

治41年度が20%で一番低くて、他の年度は25%前後である。「画き方」は、大正2年度には占める割合が明治時代より高くなり、23～24%になっている。「積木」も「画き方」ほどではないが、やはり大正2年度の方が占める割合が高く、20%を超えている。「箸・箸環・環排」は、逆に大正2年度は占める割合が4～5%まで下がっている。「つなぎ」は大正2年度には行われていない。

「三の組」は大正2年度の「週録」しか残っていないが、「摺紙」「積木」「画き方」「剪纸」の順で、次の「箸・環排」「板排」「豆細工」は同数で、「つなぎ」が最も少ない。「摺紙」と「積木」で半分を占め、これらに「画き方」を加えると三分の二になり、この他の細工は少しずつしか取り上げられていなかったことがわかる。

京都市の城巽幼稚園の明治36年の「保育案二之組」には、「成績」という欄があり、実際にやったことが記されている。「教材」の欄に書かれている予定と同様に行われたことが多いが、手技の予定が遊戯になっていたりすることもある²。「豆細工」「画き方」「積木」「織紙」「箸排」「板排」「貼紙」「摺紙」「縫取」「繫方」があげられている。このうち、最も多く行われていたのは「積木」で、少なかったのは「繫方」「縫取」「織紙」であった。明治時代から大正時代にかけての京都市幼稚園の保育日誌は、小川幼稚園と城巽幼稚園のものが残されている。小川幼稚園は、ごくわずかしか記入されていない年もあるが、明治34、35、36、39、41、42、43、44、45、大正2、3、4年度のものがある。城巽幼稚園は、明治35、38、40、43、大正4年のものが残されている。城巽幼稚園の日誌からは、「豆細工」「ツナギ方」が、小川幼稚園の日誌からは「摺紙」「縫取」が行われていたことがわかる。小川幼稚園の大正2年の日誌には「大根細工」の記述がなされている。「大根細工」がどのようなものであったのかは記されていないが、「豆細工」のようにヒゴを刺して作ったと思われる³。

「積木」が多く行われていたことは共通であるが、「織紙」や「縫取」は第一幼稚園は「一の組」のみであったのが、京都の城巽幼稚園では「二之組」でも行われていたというように、違いもみられた。

2. 題目

まず最もよく行われていた「摺紙」からみていくと、「一の組」の明治39年度には、「帆掛舟」「橋袷」「二艘舟」「風車」「鉄砲舟」「紋形」「馬」「三宝」「蟬」「かぶと」「柿の花」「帽子」「鶴」「三宝足付」「ふくら雀」があげられていた。明治44年度の2つの「週録」ともほぼ同じ題目が記入されていて、「兎」「柿」「菊皿」「紋形」「鶴」「三寶」「四足三寶」「水鳥」等を折りたたんでいた。大正2年には、「蟬」「うさぎ」「四ツ足三帆^(マ)」「馬」「巾着」「亀」「寶船」「家ノアル船」「荷車」「紋形」「鳥」等であった。いずれの年度も、「自由」や「随意」、「復習」が行われていた。

「二の組」では、明治40年度に「風車」「帽子」「二艘舟」「蟬」「カブト」「狐面」「福雀」が行われていた。明治41年度には、「舟」「帽子」「蟬」「家」「カブト」「塵取」「屏風」「三宝」が、明治43年度には「橋袷」「塵取」「雀」「家」「二双舟」「豚」「ふくら雀」「かぶと」「紋形」「柿の実」「鳥」「福助」「三寶」「香箱」「角香箱」「菊皿」が折られていた。大正2年度の二つの「週録」で取り上げられたことは若干異なるので、両方ともあげてみる。一方は「せみ」「菊皿」「兎」「袴」「鉄砲船」「鳥」「紋形」「車」で、もう一方は「蟬」「家」「ふくら雀」「菊皿」「オルガン」「袴」「鉄砲船」「鳥」「紋形」等であった。

「三の組」では、「雀」「状袋」「坐蒲団」「紙入」が行われていた。

ここで取り上げられていた題目は、京都の城巽幼稚園ではどうであったのか。城巽幼稚園の「保育案二之組」が残されているのは11月からなので、あげられている題目数は多くはないが、「菊皿」「カブト」「香箱」のように共通のものもあれば、第一幼稚園で「一の組」に出てくる「馬」や「四足三宝」も城巽幼稚園では「二之組」で取り上げられていた。この当時、各地の幼稚園で参考にされていたと思われる東京女子高等師範学校附属幼稚園の『保育要項』⁴とその図集である『手技図形』⁵には出てこないものもある。たとえば「馬」や「うさぎ」「亀」のような、幼児たちが興味を持ちそうな動物である。この点では、名古屋と京都は共通性がみられるといえそうである。

次に「積木」についてみていく。「一の組」の明治39年度には、「橋」「橋に郵便函」「門」が積まれていた。明治44年度の二つの「週録」の一方は具体的

題が「燈台」「橋」「家」のみで、もう一方では「燈台」「湯槽ト桶」「燈籠」「汽車」「橋郵便箱」「橋」「家」があげられていた。大正2年度には、「紋形」「汽車」「燈籠」が行われていた。

「二の組」では、明治40年度には「汽車にトンネル」「机と本箱」「燈籠」が、明治41年度には「橋」「舟」「灯籠」「お宮」「汽車」「汽車ニトン子ル」が積み立てられていた。明治43年度には「汽車」「門」「燈籠」「雀の家」「井戸」「机に本箱」「軍艦」「オルガン」が行われていた。大正2年度の二つの「週録」では、順序は異なるが「机二本箱」「燈籠」「お宮」「湯槽と桶（湯桶）」は共通である。一方には「井戸」「汽車」「オルガン」も記されていた。

大正2年度の「三の組」では、具体的題目は「燈籠」「橋」「井戸」であった。

「積木」では「燈籠」「宮」「軍艦」等が、城巽幼稚園でも取り上げられていた。これらの題目は、「手技図形」にも登場する。

もう一つ、よく行われていた「画き方」の題目を見ておきたい。「一の組」の明治39年度には、「舟」「鳥居」「団扇」「独楽」「帽子」「松葉」「梅」等が画かれていた。明治44年度の二つの「週録」では、若干書き方が異なるものの「燈台」「燈籠」「栗」「菊」「三宝」「軍艦」「梅ニ松」は共通である。一方では「果実」「正月ノ飾物」も行われていたことがわかる。大正2年度には、「山トス、キ」「栗」「飛行機」「菊ノ花」「梅ノ花」が画かれていた。

「二の組」の明治40年度では、「梯子」「魚」「机」「鳥居」「渦巻」が取り上げられていた。明治41年度には「国旗」「山」「魚」「栗」「菊の花」「三宝」「汽車」「家」等が行われていた。明治43年度には、「日の丸の旗」「家」「軍艦」「園庭」「舌切雀につきて」「柿の実」「電車」「燈籠」「舟」を画いていた。大正2年度には、共通して「栗」「家」「菊の花」「鳥居」「電車」「羽子板」「船（舟）」が行われていた。

大正2年度の「三の組」では、「線ヲ縦横」「山」「山ニ月」「国旗」が取り上げられていた。

「画き方」では「鳥居」「三宝」「机」等が、城巽幼稚園と共通である。これらは、「手技図形」には出てこない。

「板排」や「剪紙」の題目をみると、抽象的ないわゆる「美麗式」が「紋形」

として取り上げられていた。「一の組」では、明治39年度の「剪纸」で4回、「摺紙」で2回、明治44年度の2種類の「週録」では、「板排」で3回ずつ、「摺紙」で4回ずつ、「剪纸」で2回と3回、大正2年度は「摺紙」で2回、「剪纸」で1回、「貼紙」で2回である。「二の組」では、明治40年度は「板排」「剪纸」とも1回、明治41年度は「剪纸」で1回、明治43年度は「板排」で2回、「摺紙」で1回、大正2年度は2種類の「週録」とも「摺紙」で4回、「剪纸」で2回である。「復習」の時も入れての回数であるが、抽象的な「紋形」は、どちらかというとな「二の組」より「一の組」の方が多く行われていた。「三の組」では、「紋形」は行われていなかった。

抽象的な「紋形」は、城巽幼稚園でも取り上げていた。城巽幼稚園は「板排」ではでてこないが「貼紙」では題目がわかっている半分くらいを占めていて、しばしば行われていた。「手技図形」では、「板排」でも「紋形」が出てくるし、「紙きり」では「独楽」以外はすべて「紋形」であるので、名古屋や京都の方がいわゆる生活の形が多いことがわかる。

「豆細工」は、「一の組」では「犬」や「熊手」、「二の組」では「弥次郎兵衛」「風車」「魚」が、どの年度でも比較的よく行われていた。「帽子掛」や「鳥居」は、明治39年度には「一の組」で取り上げられていたが、明治41年度や大正2年度には「二の組」で行われていた。

「豆細工」では「鳥居」や「風車」が共通であった。第一幼稚園で行なわれていた題目の多くは「手技図形」で取り上げられていた。

それぞれの手技では、決まった題目をやるのではなくて子どもたちに任せる「自由」「工夫」「随意」も行われていた。その頻度は、組や年度、手技の種類によっても異なる。「自由」や「工夫」がどのくらいの頻度で行われていたのか、少し詳しく見ておきたい。

全体的には、「一の組」の方が「二の組」より多いが、年度により違いが見られる。最も頻度が高かったのは、大正2年度の「二の組」の一方の「週録」で、38%を占める。逆に最も低かったのは、明治43年度の「二の組」で、15%である。明治40年度の「二の組」も、20%と低い。「一の組」で高かったのは大正2年度で、36%を占めている。低かったのは明治44年度で、22%である。

ただ、この年度にはもう一つの「週録」があり、そこでは30%であった。

手技の種類別でみると、「積木」は「工夫」や「自由」の頻度が高い。明治39年度の「一の組」では、あげられた14題目中「自由」が3回、「工夫」が7回で、70%を超える。明治44年度は20題目中「自由」が3回、「工夫」が6回、「随意」が1回で、半分を占めていた。同じ年度のもう一つの「週録」では、「自由」が4回（「自由汽車」も含む）、「工夫」が3回あった。大正2年度には、13題目中「自由」が2回、「随意」が5回、それに加えて「随意汽車」もあって、60%を超えていた。「二の組」でも、低かった明治43年で30%を超え、高かった大正2年には60%近くを占め、平均で40%余りとかなり高い率であった。

「画き方」も「自由」や「工夫」、「随意」の占める割合が高い。「一の組」では、明治44年度は24%から28%、大正2年度は60%を超える。「二の組」では、明治時代には低い、大正2年度には約半分を占める。

「摺紙」では、「一の組」の方が「二の組」より「自由」や「随意」の占める割合が若干高いが、最も高い「一の組」の明治44年度の一つの「週録」で38%である。「二の組」では17%から33%である。

「板排」でも、「自由」や「工夫」、「随意」がみられる。比率からみると、「摺紙」よりも少し高いが、取り上げられている回数自体は少ない。「一の組」では、明治44年度の「週録」の一つ以外は36%を超える。大正2年度は、5回すべてが「随意」や「好ムモノ」等である。「二の組」では、大正2年度の一つの「週録」以外は、30%に満たない。

この他では、「一の組」「二の組」とも「箸排」「箸環排」で「自由」「随意」「工夫」の時があった。「一の組」では、「剪纸」で「工夫」「随意」の日があった。

「三の組」の大正2年度の「週録」にも、「摺紙」「積木」「画き方」「板排」で「自由」と記されている時があった。

では、「自由」や「工夫」の時に、幼児たちはどのようなものを作っていたのであろうか。手技の種類別に、読み取れる具体的な題目をみていくこととする。ただし、決まった題目で「工夫」するような場合は、取り上げていない。

まず「積木」の「一の組」であるが、明治39年度には「軍艦」「汽車」「門」「橋」「橋に郵便函」があげられていた。明治44年度には、「汽車」「家」「燈籠」「軍艦」「橋」「燈台」と、もう一つの「週録」には「汽車」「家」と記されていた。大正2年度には、「家」「門」「西洋館」「紋形」「汽車」「オルガン」「国技館」と書かれていて、明治時代とは異なる題目もみられた。「二の組」でも、明治40年度には「門」「橋」「椅子」「机」「橋ニ郵便函」「汽車」等があげられていて、「一の組」と同じ題目もあることがわかる。明治41年度には、「記念碑」「トン子ル」「門」「汽車」「燈籠」「橋」「お宮」「花」「家」が記されていた。明治43年度には、「西洋ノ家」「門」「塔」があげられていた。大正2年度には、「燈籠」「家」「船」「洋風の家」「軍艦」「オルガン」「汽車」「机ニ本箱」「トン子ル」が書かれていたが、もう一つの「週録」には「汽車」「燈籠」「湯槽」くらいである。大正2年度の「三の組」では、「汽車」「トン子ル」「門」「家」「井戸」「腰掛」があげられていた。各組、各年度に共通してあげられている題目もあれば、「国技館」のように大正2年度の「一の組」のみにあげられているものもある。「門」「橋」「家」「汽車」「燈籠」「軍艦」等は、組や年度によって異なるが、決まった題目としてよく取り上げられていたので、手本通りに積んだ経験を元に工夫していたであろうことがうかがえる。「一の組」で「工夫して色々面白きものを積みて」（明治44年度）ということもあれば、「別に珍しきものを積たる者なかりき」（明治44年度）ということもあった。

「画き方」では、「一の組」の明治39年度には「汽車」「鳥居」「旗」「軍艦」「家」「山」「兵士」があげられていた。明治44年度には、一方は「汽車」等のみであるが、もう一つの「週録」には「汽車」「電車」「軍艦」「旗」「三寶ニ飾」「羽子板」「コマ」「門松」があげられていた。ここでは「女兒ハ何レモ応用力乏シク大凡机三宝」であるが「男兒ハ実ニ珍シキモノ多ク」という記述もみられる。ただし、珍しいものが何であったかは記されていない。大正2年度には、「猫」「軍艦」「山二月」「魚」「菊の花」「電車」等があげられ、「桜鳥ノバク発」という当時あったことが描かれていたこともあった。

「二の組」では、明治40年度には「旗」「山」「軍艦」「鳥居」「机」「独楽」が、明治41年度には「汽車」「魚」「旗」があげられていた。明治43年度には具体的

な題目は記されていない。大正2年度には「山」「舟」「旗」「月」「汽車」「電車」「家」「船」「山に月」「鳥居」「羽子板」「門松」「山二船」「国旗」「軍艦」と、多くの題目が記されている。もう一つの「週録」には「飛行機」「汽車」「菊の花」「旗」「舟」「山」「家」「鳥居」が記されていた。大正2年度の「三の組」では、「電車」「山」「国旗」があげられていた。

ここでも「積木」と同様、組、年度に共通してみられるものもあれば、「桜島ノバク発」のように当時の状況に影響を受けたものもある。また、決まった題目として書き方を教わったものを元にして、画いたであろうとこともうかがえる。

「摺紙」では、「一の組」の明治39年度は、題目の記入がない。明治44年度には、「舟」「菊皿」「三宝」「鶴」「からす」が、もう一つの「週録」には「三寶」「舟」「袴」があげられている。大正2年度には「椅子」「鶴」「馬」「菊皿」「蓮花」「角口箱^(マツ)」が、記入されている。

「二の組」では、明治40年度には題目が記入されていない。明治41年度には、「塵取」「舟」「セミ」「奴」「坐蒲団」「家」「三宝」「船」が記されていた。明治43年度には、「大凡は舟三寶」という記述がみられるのみである。大正2年度には、二つの「週録」とも「舟・船」「オルガン」「袴」「紋形」があげられ、一方にはさらに「かぶと」「三宝」「襦袢」「家」「帆掛船」「宝船」「二隻船」「烏」「菊皿」があげられていた。大正2年度の「三の組」では、「山」「本」「舟」「襦袢」「状袋」「雀」「三宝」「奴」が記入されていた。

「摺紙」でも、組、年度に共通してみられるものと、「鶴」のように「一の組」だけで記入されていたものとある。「摺紙」は折り方が決まっているので、「工夫」という時はなくて、それまでに習って知っているものの中から、作りたいものを作ったと思われる。ただし「三の組」で「中ニ三宝奴等兄姉ニ教ヘテモラヒタリトテ摺ミタルモノモアリキ」と記されていて、幼稚園でやっていないものでも折れる幼児がいたことがわかる。

「板排」では、明治39年度の「一の組」で「汽車」「橋に舟」「紋形」が記されていた。明治44年度には、一方は「燈台」「橋二舟」「紋形」「汽車」「橋」「人」「飛行機」「船」、もう一方は「花」「紋形」と記入されていた。大正2年

度は「飛行機」「門」であった。

「二の組」の方が記入されている題目が多く、明治40年度には「汽車」「橋」「燈籠」、明治41年度には「舟」「橋」「船」「燈籠」「門」「紋形」「三宝」「鉄橋」が記入されていた。明治43年度は「舟」「燈籠」と少ないが、大正2年度には「汽車」「橋二舟」「家」「燈籠」「軍艦」「橋」「舟」「風車」「面白き家」「門」等があげられていた。ただし、もう一つの「週録」には「舟」「汽車」のみである。大正2年度の「三の組」では、「梯子」「汽車」「蒲団」と記されていた。

ここでも、組、年度に共通してみられる題目もあれば、そうでないものもある。一度ならべ方を教わったものをならべていたようで、明治39年度の「一の組」には、10月1日に「橋二舟」をならべた後、10月22日の「工夫」の時に「皆大抵橋に舟を排べて喜びたりき」と書かれている。明治41年度の「二の組」には、「先週幼児ノ一人ガ工夫シタル鉄橋ヲ排ベシメタルニ皆ヨク排ベタリ」という記述がみられ、工夫した形を取り上げて次の課題にしていたこともあった。「工夫」の時によく出来たと思われる幼児の形を積んだりならべたりさせたという記述は、次の指導方法でもふれるが、「積木」や「板排」でも何度かみられる。

「随意」は、城巽幼稚園の明治36年の「保育案二之組」では、「豆細工」と「画方」で約三分の一であった。一つの題目を取り上げると、次が「復習」、その次が「随意」という流れの時が多かった。「随意」の時に作られていたものの記入は少ないが、「積木」や「板排」「箸排」で「燈籠」や「軍艦」、「摺紙」で「前日ノ亀」「風車」というように、ここでも作ったことがあるものを作っていたことがうかがえる。小川幼稚園の日記には、「画方（自由画）」という記述がみられたが、幼児たちが何を作ったかは記されていない。

3. 指導方法

「週録」には、どのように指導したかに関する記述もみられる。組、年度により記述の仕方は異なり、「一の組」では明治39年度、「二の組」では大正2年度の一方の「週録」に記述が多い。明治44年度の「一の組」と大正2年度の「二の組」は、2種類ずつ「週録」が残されているが、どちらも一方は記述が

少ない。指導方法は、「一の組」「二の組」とも、手技の種類により共通することが多いので、それぞれにみていくこととする。

まず「摺紙」であるが、「大紙にて少しづつ、摺み示して」という記述が登場し、大きな紙を用いて少しずつ折ってみせ、幼児はそれをみながら少しずつ折るようにしていたことがわかる。「大紙にて」が書かれていない時も、「少しづつ、」が書かれていない時もあるが、指導方法に関しては、「一の組」「二の組」とも「摺み示して摺ませる」という記述が大半である。これ以外には、「一の組」では「一同ニ折り方ヲ質問シ後」（明治44年度）、「紙ノ形及比色ヲ幼児ニ問ヒ答ヘシム」（大正2年度）という記述が見られる。切込みを入れて折る場合に、「少シハサミヲイレル足ヲ摺ム所ダケ保姆ハサミニテ切りヤリタリ」（大正2年度）と、保育者が手を貸していることもわかる。また、他の組でやって折ることができなかつた時には、題目を変えて指導している。前に折つたものを応用して作ることも行われていた。「二の組」では、「少しむつかしき故か少しづつ、手伝ひて」（明治43年度）ということや、前の回の続きの時に「口にて伝へて手本を示して」（大正2年度）「以前摺みし紋形に連絡せしものなれば質問志て摺ましめしに」（大正2年度）ということもあった。「二の組」では、保育者が手伝えることは、この「摺紙」で比較的多い。

「画き方」では、「塗板に画き示して」という記述が多くみられる。「少しづつ、」と記されている場合もある。「二の組」では、「板示して画かしめたる」（明治40年度）という記述も見られるが、いずれにしても、手本を画き示して画かせていたことが分かる。「一の組」では「果実ノ図ヲ見セテ各自ノ思ヒシモノヲ」（明治44年度）画かせることもあった。こうした中で、大正2年度の「一の組」では、「外庭ニオチテラル銀杏ノ葉ヲ拾ヒ幼児ニ一枚ツつ、与へ見テ書カシメシニ」という記述から、実物を見て画くことも行われたことがわかる。「二の組」では、「塗板ニ幼児ガ汽車ヲ画キタレバ汽車ニ付テ話ス」（明治41年度）こともあった。「二三名よく画きしのみにて後は手を持つて画かしめたり」（大正2年度）ということも行われていた。

「積木」では、「少しづつ、積み示して」「積み示して」という記述が多い。「一の組」の明治44年度、「二の組」の大正2年度には、「大積木にて」という記述

が見られ、「摺紙」の「大紙」と同様、大きなものを用いて見せることが行われるようになったことがわかる。この「積木」では、「二の組」で「工夫シタル子ヲ前ニ出シ積マシメ衆児ニミセシメタリ」（明治41年度）、「一の組」で「一番上手ニ出来シ幼児ノナセシ物ヲ一般ニ積マシム」（大正2年度）というように、「自由」や「工夫」の時に、よく出来たと思われる子どもの作った形をまねて作らせることも行われていた。「一の組」では、積んだ後に「構造効用等に付試問」（明治39年度）したり、「時間ノアリシタメニ積木ノ名称形、数ヲ調べサセヌ」（大正2年度）というように、ただ積むだけではなかったことがうかがえる。

「板排」や「箸排」「箸環排」でも、「塗板に画き示して」並べさせるというやり方が主流であった。「少しづつ」と記されている場合もある。時には実際にやって見せたようで、「板排」で「一の組」に「少しづつ、作り示して」（明治39年度）、「二の組」に「一個つ、排ベ示してなさしめたるに」（大正2年度）という記述が見られた。ここでも「積木」と同様、幼児の工夫を取り上げていたようで、「先週幼児ノ一人ガ工夫シタル鉄橋ヲ排ベシメタル」（明治41年度「二の組」）と記されていた。この塗板に画いて並べさせることは、「三の組」でも行われていた。

「剪纸」でも、「塗板に画き示し」「少しづつ、張り示して」やらせたこともあった。「二の組」では、先に述べたように「一の組」より頻度が低いが、「一枚つつ張らせたる」（大正2年度）というように、少しずつ進めていたことがうかがわれる。

「豆細工」でも「塗板に少しづつ、画き示して」教えていたが、「二の組」では「手本を示して作らしめたるに」（大正2年度）というように、実際に作り方を示しながらやらせることもあった。

「縫取」は「一の組」だけであるが、「塗板にて少しづつ、説明して」（明治39年度）やらせていた。

こうした指導方法は、城巽幼稚園でもなされていた。「積木」では、保姆が手本を見せながら積ませていたし、「摺紙」では、「教エツ、摺マシメ」ていた。やって見せてから折らせるという教え方は、「摺紙」では一般的であったと思わ

れる。早くできた時には「随意」にしたり、「板排」でならべるものについて説明したりすることも、共通していたといえよう。

4. 出来上がり具合

指導の結果、出来上がりはどうであったのか。全体的に「上出来なりき」「割合によく出来たり」「結果良なりき」という記述が多いが、「週録」を記録した保姆の個性もあって、若干違いも見られる。

まず「一の組」であるが、明治39年度には「結果良なりき」「よく出来たり」という記述が多い。「画き方」では「よく画きたり」、「摺紙」では「よく摺みたり」という書き方の時もある。「非常によく出来たり」という時も、回数は少ないが「画き方」「剪纸」「積木」であり、「箸排」では「上々出来なりき」「非常に出出来なりき」という記述もみられた。「摺紙」では「非常によく摺みたり」、「剪纸」では「非常によく結果良々なりき」「割合によく出来たり」「可なりに出来たり」という記述も比較的多い。「割合に」「可なりに」という記述が多いのは、「摺紙」と「画き方」で、「剪纸」「積木」「豆細工」「板排」でもなされていた。「縫取」でも「始めての割によく出来たり」「可なりに出来たり」「可なりになしたり」と記述されていた。

明治44年度には「上手に排べたり」「上手に摺みたり」「上手に画きたり」「上手に積みたり」というそれぞれの種類に合わせた表現が多いが、やはりよく出来たという意味の記述が多い。「非常によく出来」というのは、「豆細工」で1回出てくるのみである。「可なり上手に」という記述は「画き方」で多くみられ、「剪纸」「摺紙」「豆細工」でもみられた。「縫取」では、この年度にも「始めての割によくなしたり」と記述されていた。同じ明治44年度のもう一つの「週録」でも「ヨク折り得タリキ」「上手ニ排べ得タリキ」「上手ニ積み得タリキ」というような手技の種類に合わせた表現が多い。ここでは、「美シク出来シ上ゲタリ」「美シク折り得タリキ」「美シク排べ得タリキ」という記述もみられる。ここでは「可なり」「割合に」という記述はなされていない。

大正2年度には、「上手ニハリタリ」「上手ニナシタリ」「成績ヨロシカリキ」という記述がみられるが、結果に関する記述は少ない。

反対に出来が良くなかったこともあり、明治39年度には「摺紙」で「余りよく出来ず」「随分六つ敷可つた様なりき」、「画き方」で「非常に不出来にて」「間々出来ざるものもありき」という記述がみられる。

明治44年度には「板排」で「余り上出来ならざりき」、「剪纸」で「余り上手に出来ざりき」、「画き方」で「六ヶ敷し様子にて出来も不出来」と記述されている。同年度のもう一つの「週録」では、「画き方」に「六ヶ敷シク画キ得ザリシモノ多カリキ」「六ヶ敷シキトイヒテ画カザルモノ多カリキ」「六ヶ敷シキト全キ形ヲ画キシハ少々全体不出来ナリキ」「甚ダ不成績ニ終リタリ」というように、不出来のときがかなりあったようである。「摺紙」でも「半バ忘レ居タリシモノ多ク不成績ナリキ」「大体不出来ナリキ」という日があった。「剪纸」でも「大体不出来ナリキ」「間違へしもの多く不出来なりき」という記述がなされていた。「豆細工」では、「損ジ易クシテアセリ面白カラザリキ」、「織紙」では「皆違ヒ甚ダシク中々六ヶ敷シカリキ」という日もあった。

大正2年度には、「画き方」で「少シムツカシキタメ出来ヨロシカラズ」「出来ワルシ」、「貼紙」で「出来悪シク困難ナリキ」、「板排」で「積木ヨリ余り好マズ出来ワルカリタリ」、「摺紙」で「出来ハ不出来ノ方ナリ」と記述されていた。

「二の組」でも、「よく出来たり」「上手に」という記述がしばしばなされている。

明治40年度には、「よく積みたり」「よく排べたり」「よく出来たり」「よく画きたり」と書かれている日や、「非常によかりき」「誠に上々出来なりき」「非常によく出来たり」という日もあった。

明治41年度には、「ヨク出来タリ」「上出来ナリキ」「結果ヨカリキ」「上手ニナシタリ」という記述と、「上手ニ画キタリ」「上手ニ排ベタリ」「上手ニコシラヘタリ」という記述がなされている。ここでは、「巧ニ考ヘテ積ミタリ」「巧ニ工夫シテ積タリ」「巧ニナシタリ」「巧ニ排ベタリ」というような記述もみられる。また、「ヒトリニテ摺ミタリ」「一人モ出来ヌモノナカリシ」と、手伝わずに出来たことや、出来ない幼児がいなかったことを書き記している時もあった。「割合ニ上手ニ」という記述も、「剪纸」で1回出てくる。

明治43年度も、「よく出来たり」「上手に出来たり」という記述と、「上手に並べたり」「上手に折り得たりき」「上手にはり得たりき」というような記述がみられる。「画き方」のここでは、「実に面白かりき」「面白く画きたり」という記述もなされていた。

大正2年度にも、「よく出来たり」「上出来なりき」という記述とともに、「上手に積みたり」「上手に画きたり」「上手に摺みたり」という記述がなされている。ここでは、「美麗に張りたり」、「出来上りも奇麗なりき」（剪纸）という書き方もみられる。「可なり」「割合」という記述は、「画き方」「板排」「摺み紙」で出てくる。同じ年度のもう一つの「週録」では、「上出来なりき」「よく出来たり」という記述が多い。「非常に上出来なりき」ということもあった。「大抵は」「割合に」という時もあった。「箸環排」で「よく考へて排べたり」と記録されている日もあった。

「三の組」の大正2年度には、「巧ニ摺ミタリ」「ヨク排ベタリ」「上手ニヒキタリ」「巧ニ積ミタリ」という手技の種類に応じた書き方が多くみられる。

「二の組」でも、出来なかった時や出来が悪かった時もあり、明治43年度と大正2年度は、こうした記述が比較的多い。

明治40年度には、「画き方」で「出来ザル者多ク故ニ騒々シカリキ」、「摺紙」で「六ヶ敷しかりし様子なりき」という記述があるのみである。

明治41年度には、「ツナキ」で「六ヶ敷カリシタメカ間違ヘタリシモノアリシ」、「板排」で「間違ヘタルモノアリシ」と記述され、「六ヶ敷カリシタメカ画ケヌモノアリキ」という記述もみられる。「摺紙」では「二三人出来ヌモノアリシノミ」と、出来ない幼児がいたことが記されていた。

明治43年度には、「出来ざりき」「不出来」という記述がしばしばみられる。「摺紙」では、「一人にて出来ざるもの多かりき」「手伝ひやらされど出来ざりき」等の記述がみられ、難しかったことをうかがわせる。「板排」で「少しさわがしくて不出来のものも有りたり」、「豆細工」で「中々六ヶ敷そうなりき」と記述されていた。「環排」では、「未だ教へぬ前に出来しも有り又なかなか出来ぬもありたり」と、出来る幼児と出来ない幼児の差が大きかった様子がうかがえる。

大正2年度には、一方の「週録」は「不出来なりし」「上出来ならず」という記述が多い。「手伝ひやりたり」という記述もみられる。こうした記述は、「箸環排」「摺紙」「板排」「剪纸」「豆細工」「画き方」でみられるが、その半分以上が「摺紙」でなされている。特に「手伝ひ」は主に「摺紙」でなされていた。「少しむつかしきやうなりき」（画き方）という書き方もなされていた。もう一つの「週録」では、「余り上出来ならざりき」「なかなか六ヶ敷かりき」「大抵手伝ひたり」「上手に張りたれど画き方は下手なりき」「六ヶ敷様子にて出来上りも余りよろしからず」という記述がみられた。

「三の組」の大正2年度には、「半数ハ間違ヘテナシタレバ」「三分ノ一ハ保姆手伝ヒタリ」「半數位ハ紙ヲ汚シタリ」というように、出来る幼児と出来ない幼児がいて、手伝っていたことが分かる。

城巽幼稚園の「保育案二之組」では、「一人モデキヌ者トテナク」「成績宜シカリシ（キ）」「成績可ナリキ」という記述とともに、「成績宜シカラズ」というときもあった。よかったときが多かったのは「豆細工」「画方」「積木」で、逆に「宜シカラズ」というときが比較的多かったのは「箸排」「摺紙」である。ここでは「縫取」も取り上げられていたが、保姆も難しいと思っていたようで、「案ジ居リシニ皆ヨクナシタリ」という記述がなされている。城巽幼稚園の大正3年の「保育案」は、下のほうの三分の一程がその日の様子の記述になっている。そこには、「板排」で「割合ニ能ク排ベタリ」と記されている。「板排」の「随意ニ工夫」の時には「タクミニナレリ」と、上達してきたことが記述されている。「摺紙」では、出来ない幼児に「他児コレヲテツダヘリ」と、出来た幼児が手伝っていたこともあった。小川幼稚園の日誌では、前述した「大根細工」の時に「よく出来たり」と記述されている。

5. 幼児たちの反応、様子

幼児たちの反応としては、「一の組」「二の組」とも年度により違いが見られるが、全体的には「喜びたり」「喜びて」というのが多く、「非常に喜びたり」「大喜びなりき」というような記述もみられる。

まず「一の組」であるが、明治39年度はこうした記述が少ない。「喜びたり」

「喜び居たり」「喜びて」という記述は、「板排」「摺紙」「積木」「画き方」でなされていた。「非常に喜びたり」「大いに喜びて」という類の記述は、「豆細工」「板排」「積木」「輪つなぎ」でなされていた。これに加えて、「愉快がりたりき」「大いに愉快がりたり」「非常に愉快がりて」という記述が、「積木」「剪紙」でみられた。幼児たちが喜んだのは、「積木」が4回で一番多く、ついで「板排」「摺紙」で、後は1回ずつであった。

明治44年度は、「喜びたり」「喜びたりき」「喜びて」という記述が、「摺紙」「積木」「剪紙」「板排」「箸環排」「豆細工」「織紙」でみられた。「積木」では「非常に喜びたり」と記されていた時もある。ここでも、幼児たちが一番喜んだのは「積木」で5回、ついで「摺紙」「剪紙」で、後は1回ずつであった。同じ年度のもう一つの「週録」には、喜んだという記述が多い。「ヨロコビテ」「ヨロコビタリ」という記述が、「積木」「摺紙」「豆細工」「画き方」「板排」「縫取」でなされている。「大ヨロコビ」した時も、「板排」「積木」「摺紙」「剪紙」「豆細工」「織紙」「縫取」であり、「甚だ喜んだという時も「箸環排」「縫取」であった。「積木」では、「楽シゲニ」と記されている日もあった。ここでも一番喜んでいたのは「積木」で、5回記入されていた。「摺紙」「板排」「豆細工」は4回ずつ、ついで「縫取」「画き方」で、後は1回ずつであった。これに加えて「板排」では、「面白ゲニ」という記述もみられた。

大正2年度には、「喜ビテ」「喜ビス」という記述が、「摺紙」「画き方」「積木」「貼紙」「剪紙」「織紙」「板排」「箸排」「豆細工」でなされていた。「大ニ喜ビテ」というのは、「箸環排」で1回出てくるのみである。「喜ヒ合ヒタリ」という記述が、「画き方」でなされている。幼児が一番喜んだのは「摺紙」で、9回記されている。ついで「画き方」が7回である。「積木」では2回、「板排」では1回しか記されていないので、今までの「週録」に見られた順序とは異なっていることがわかる。ここでは「浄カニナス」という記述もみられた。

「二の組」では、全体的に「一の組」より喜んだという記述が多い。

明治40年度には、「喜び居たり」「喜びたり」「喜びて」という記述が「積木」「摺紙」「板排」「箸排」「画き方」でみられた。「非常に喜びて」「非常に喜びたり」と記されている日の方が多く、「豆細工」「剪紙」「積木」「摺紙」「つなぎ」

でみられる。「愉快に感じたる様子なりき」「愉快になし」という記述が、「箸環排」「積木」「画き方」でなされていた。「愉快」も入れると、幼児たちが一番喜んだのは「積木」、ついで「豆細工」「摺紙」で、「画き方」「剪纸」等が2回ずつ記入されていた。ここでは、「熱心ナル模様ナリキ」「熱心になし」という記述が、「板排」でなされている。

明治41年度には、喜んだという記述は少ない。「非常ニ喜ヒタリ」「大ニ喜ヒ」という記述が「摺紙」で、「大喜ひ」が「豆細工」で、「大喜ヒナリキ」が「剪纸」でなされているだけである。その代わりに、「興味ヲ持テ」という記述が何回も出てくる。「板排」「剪纸」でみられ、「非常ニ」「大ニ」「格別」に「興味ヲ持テ」という記述も、「箸排」「積木」「剪纸」「摺紙」「豆細工」「ツナギ」でみられる。

明治43年度には、「よろこびて」「よろこびたり」という記述が「画き方」「積木」「板排」「摺紙」「剪纸」「豆細工」でなされていた。「大よろこびにて」という記述は、「積木」「箸環排」「つなぎ」でみられた。「喜び合ひたり」「喜び合ひぬ」という記述は「積木」と「摺紙」で、「大層喜び合ひて」は「豆細工」でなされている。これに加えて、「たのしげに」と「摺紙」で記入されている。幼児たちが喜んでしたのは「積木」で、他を引き離している。ついで「摺紙」と「画き方」、さらに「板排」と「豆細工」で、後は1回ずつ登場するだけである。

大正2年度の二つの「週録」は、ともに喜んだという記述が多い。「喜びたり」「喜びたりき」「喜びけり」「喜びて」と記されていたのは、「積木」「摺紙」「剪纸」「画き方」「板排」である。「大喜びなりき」「非常に喜び」と記入されていたのは、「摺紙」「板排」「積木」「画き方」である。幼児たちが一番喜んだのは「積木」で、ついで「摺紙」である。ただ「大喜び」は「摺紙」の方が多い。「画き方」「剪纸」「板排」も喜んでやっていた。ここでは、「熱心に」という記述も、「画き方」「摺紙」「板排」「箸環排」でなされ、「画き方」で多くみられた。もう一つの「週録」でも、「よろこびたり」「よろこびて」という類の記述が、「摺紙」「画き方」「積木」「箸環排」「剪纸」「豆細工」「板排」でみられる。「大いに」「大変」「非常に」喜んだという記述は、「豆細工」「積木」「剪纸」で

なされていた。「摺紙」では、「よろこひたれとも」と記入されている時もあった。ここでも、「熱心に」という記述が「画き方」と「摺紙」で、「真面目に」という記述が「画き方」でみられた。幼児たちが喜んでやっていたのは、「摺紙」「積木」「画き方」の順で、少なくなって「剪纸」「箸環排」「豆細工」で、「板排」は1回のみであった。

この大正2年度の二つの「週録」を比較すると、幼児たちが喜んだことに若干の違いがみられる。一方は「積木」を喜んだという記述が10回も出てくる。「摺紙」は7回、「画き方」は4回である。もう一方は、「摺紙」「積木」「画き方」が8～6回でならんでいる。「箸環排」や「豆細工」で喜んだという記述は、一方のみである。同じ年齢で、似通った題目が取り上げられているにもかかわらず、幼児たちの反応が異なるのは、組の担任の見方にもよるのであろうか。

大正2年度の「三の組」では、喜んだという記述が出てくるのは「摺紙」と「豆細工」のみである。「摺紙」では、雀を折った時に、難しくて過半数が羽のところが出来なかったが、出来上がって「机ノ上ニ乗セ羽ヲ働カシ喜ビ居タリ」と記されている。もう一回は、「状袋」を折った後、菊花の剪纸を張ってやったところ「大喜ナリキ」と記されていて、いずれも「摺紙」そのものを喜んだというわけではない。「豆細工」でも、弓を作った時に保姆が矢をこしらえて与えたところ「非常ニ喜ヒタリ」という記述になっている。「豆細工」では、剪纸とあわせて国旗を作った時には、皆よく出来て「大満足ニテ万歳ヲ連呼セリ」と書かれている。ここでは、「興味ヲ以テ」やったことが「積木」と「画き方」で2回ずつ出てくる。「非常ニ興味ヲ以テ」という記述は、「ツナキ」と「積木」で1回ずつなされていた。

幼児たちがどのような細工を喜んでやっていたかに関しては、年度や組によって若干の違いはあるが、「一の組」「二の組」とも喜んでやっていたのは「積木」「摺紙」といえそうである。「一の組」では「板排」さらに「豆細工」、「二の組」では「画き方」も喜んでやっていた。京都の城巽幼稚園では、本論集第55号でもふれたように「豆細工」と「板排」を喜んでやっていたと思われ、「摺紙」では「喜んだ」という記述が見当たらなかった。「縫取」でも「非常ニ悦ビ」と記されていた。第一幼稚園と城巽幼稚園では特に「摺紙」で違いがみら

れるが、それには、教え方や折った後の扱いの違いが影響していると思われる。第一幼稚園では、遊んだり持ち帰らせたりしていたのに対して、城巽幼稚園では「姓名ヲ記シ預リタリ」という日が多かった。

城巽幼稚園の大正3年の「保育案」には、「積木」で「喜ビテ」「喜ベリ」という記述がみられた。「画き方」では、「随意」の時に「非常ノ嬉ビニテ」と記されていた。

作った後に関する記述は少ないが、その様子を探ってみたい。全体的には、作った後にそれについて質問、問答をするというのが多いが、歌を歌ったり、遊んだりしたこともあった。

まず「一の組」であるが、明治39年度には、「積木（橋）」のところで、「後構造幼用等に付試問したるに一々よく答たり」と、「摺紙」で「後鶴につき質問したり」と記述されている。「画き方」では、「後ぬぐい又画かしめたり」と、一度画いた後もう一度画くような時もあった。

明治44年度には、「摺紙」の「自由」の時に、「後各々につき質問したるによく答えたり」と記されていて、やはり作った後にそれについて聞いていることがわかる。「画き方」の「菊花」では、「菊の花の歌を歌ひたり」と記され、関連する歌を歌っていた。「画き方」では、「紙に書かせお土産として皆に持たせかへしたり」という時もあった。もう一つの「週録」には、こうした記述はみられない。

大正2年度にも、「貼紙」の「鳥ト朝日」で「鳥ニ付話ヲス」、「摺紙」で「紙ノ形及ビ色ヲ幼児ニ問ヒ答エシム」というように、話をしたり質問したりしている。「積木」では、時間がある時に「形、数ヲ調ベナオシオキタリ」「名称形、数ヲ調ベサセヌ」というように、形や数についても教えていたことがわかる。「摺紙」の「馬」では、「喜ビテヒンヒントテハシル処似シテ喜ビ居タリ」と、幼児たちが遊んでいる様子がうかがえる。「馬ノ復習」では、はさみで足を切ったり鉛筆で目を書いたりして、「一層喜ビタリ」と復習で同じことを繰り返すだけでなく、工夫している。「箸環排」の「電車」では、「電車ノ唱歌シラサリシタメ残念デアリタリ」と記され、関連する歌を知っていれば歌っていたことがうかがえる。

「二の組」では、明治40年度に質問、問答したという記述が多くみられる。「画き方」で「梯子」を画いた後、「構造効用を質問したるに之又よく答へたり」しているし、「随意」の時にも「質問し」となっていて、画いたものについて聞いていることがうかがえる。「摺紙」の「二艘船」では、「舟ノ種類等ヲ問答セシニ皆答へたり」と記されている。「カブト（復習）」や「随意」の時にも、後から質問している。「積木」の「自由」でも「終リテ問答シタルニ何レモヨク答へたり」、「箸環排」の時にも「後質問に対してもよく答へたりき」と記されていて、作った後にしばしば質問して確かめていたことがうかがえる。

明治41年度には、説明したことは記されているが、質問、問答に関する記述はみられない。「画き方」で幼児が汽車を画いた時に、汽車について電車と異なり「蒸気ノカニテ進行スルコト」「土瓶ノ湯気蒸気ノコトヲ説明」したところ不思議そうであったことが記されている。「豆細工」の「鶏」では、「ヒゴ二本にて足」「ケイトにてトサカ」「出来上りたるをみてコケッコウ」と「興じあへり」と遊んでいる様子がみられる。

明治43年度には、「積木」の「門」で「戸を開閉して喜び合ひたり」、「摺紙」の「雀」で「飛びながら雀雀と喜び合ひぬ」と、作った後遊んでいた様子が簡単にではあるが記されている。

大正2年度の二つの「週録」には、このような記述は見当たらない。

大正2年度の「三の組」では、「摺紙」の「雀」で「羽ヲ働カシ喜び居タリ」、「豆細工」の「唾鈴」で「出来上リタル後体操スルモノナリト話キカセタルニ皆一ニ二トテ体操ノ真似ヲシタリ」と、遊んでいた様子が記されている。「豆細工」の「国旗」では、「大満足ニテ万歳ヲ連呼セリ」という様子も書かれていた。

作った後に関連する歌を歌ったり、作ったものについて質問したりということは、城巽幼稚園でも行われていた。例えば、「摺紙」では「馬」のところで「余時アリタル故馬ノ歌ヲ歌ヒ楽シク終トナセリ」と、「豆細工」の「風車」では「イツニナク早くナシ風車ノ歌ヲ歌ヒ喜び持チ帰リタリ」と記されている。

おわりに

明治30年代には、既に幼児たちにわかりやすいように、「摺紙」で「大紙」を用いたり、「積木」で「大積木」を用いたりして、やり方を見せていた。指導方法の工夫がなされていたといえる。

幼児たちが「自由」に作ったり「工夫」したりすることも、明治時代後半には広がっていったと思われる。今回分析した第一幼稚園の「週録」からも、「積木」や「画き方」ではかなりの頻度で「自由」や「工夫」が組まれていたことがわかった。特に大正2年度の「積木」や「画き方」では、半分以上が「自由」や「工夫」であった。手本通りに積んだり画いたりすることから脱却し、幼児の自由や工夫を大切にするように変化していることがうかがえる。城巽幼稚園でも、明治36年には「豆細工」や「画方」では、約三分の一が「随意」であった。いわゆる大正自由教育の広がり以前に、幼稚園でこのように「自由」や「工夫」「随意」を重視していたところがあったことは、特筆に値するといえよう。

註

- 1 名古屋市立第一幼稚園の資料に関しては岡林恭子園長、栗木節子主任に、京都市立の幼稚園の資料に関しては竹村佳子学芸員にお世話になりました。記して感謝いたします。
- 2 たとえば、保姆がお休みすると、手技の予定が遊戯になったりしている。
- 3 「荷車 旗 トロツク ハシ子舟 椅子 机鳥居など」を作ったという記述から、推測した。
- 4 女子高等師範学校「女子高等師範学校附属幼稚園保育要項」、1906年。
- 5 女子高等師範学校附属幼稚園「手技図形」、高等女子学会、1906年。

（引用文は、新字体を用いたが、それ以外では原文の表記に依った。）